

リュトブフの『ドゥニーズ坊のこと』

岩本修巳

〔和訳の前に〕美しい娘に懸想した修道士が、娘の信仰心を良いことに彼女を男装させ修道士に仕立てて身近に引き寄せ、己の欲望を遂げるが、後それがばれて、娘は幸福な結婚をし修道士は金を支払って許される、という話。終幕近くで登場人物の口を借りて、ダンス・ギターなど芸人の楽しみないしは商売を取り上げるのに加担したとか、坊主の癖に金儲けが上手い、などの罪状をあげフランシスコ会を槍玉に上げる。ここにはジョングルールの本音が出ていると言えよう。しかし托鉢修道会を攻撃するいつもの調子と比べ、穏やかで控え目である。悪事が露頭しそうになったときの色男の狼狽ぶりや犯人に対する寛大な罰にもフランシスコ会への敵意は伝わって来ない。煽動家が影を翳めているとすれば代わりにリュトブフはファブリオ作家に徹しているのだろうか。確かにやや際どい箇所があるが、これが無ければ味付けの足りなさで首を傾げる所だろう。そして悪漢も含めてのハッピーエンドは珍しい。哄笑を誘うより説教調が匂うのに気がひけたのかどうか判らないが、作品中で作者の名乗りは無い。

リュトブフの現代フランス語訳は前世紀から試みられているが、ここ数年来デュフルネとザンクによって、いわば競い合う形で全作品が現代語化され始めた。『ドゥニーズ坊のこと』を収めるのはA写本:BN837, fol. 329 v. 1 ~ fol. 331 r. 2 及びC写本:BN1635, fol. 60 r. 1 ~ fol. 62 r. 2 の2種であるがファラル・バスタンによる全集版は前者を、ザンク訳は後者を底本にしている。なおデュフルネ訳は未刊である。

両写本の異同のうち表題始め主要なものの大部分が既にファラル・バスタン版で指摘済みである。ザンクがC写本を採用したのはA写本には8行が誤って脱落しているからであり、それに関わらずファラル・バスタン版がA写本を選んだのは、C写本の方言的特徴が首尾一貫しない点から見て写字生の語学的力量ひいては原本への忠実度を低く評価したからだろう。一長一短だが、筆者はファラル・バスタン版に倣ってA写本を採り、脱落部(第161~168行)はC写本の読みを借りることにした。もちろん両者で大きな意味のずれを生じる部分は、その旨を記すことにする。段落を数ヶ所設けた上、全体を止むを得ず散文訳したが、原文にはもちろん句読点は無く、ありふれた平韻8音綴で制作されている。C写本にある飾り文字はファラル・バスタン版が指摘するように、段落を必ずしも適切に示していなので配慮しなかった。

和訳：ドゥニーズ坊のこと

袈裟だけでは坊さんになれません。(1)

仮に人里離れて隠修士として暮らしている男がいて それらしい身なりをしていても、その身なりにふさわしい 清い行いをしていなければ 私は、その身なりを藁二本の値打ちも無いと思う。(2～7) ところで、見なりの立派な人は沢山おられ、なるほど美々しい見掛けに思われるが それは花を見事に咲かせて 実の成らない木々に似ているのだ。(8～11) そんな人達が死ぬ時は、必ず 苦しみは大きく、恥は大きいものだ。(12～13) 諺に曰く、『輝くもの全てが金とは限らない』と。

(14～15) 私はこのために、自分が死ぬ前に、パリからイングランドまでの範囲で探し求められるうちで 一番美しい女性の身に起こった出来事を物語りにしなければなりません。(16～20) それがどのようにして起きたかをお話しましょう。(21)

二十人を越える身分ある人々が彼女を妻に、と求めましたが 彼女はどうあっても結婚の道などに足を踏み入れたくはなかったので 処女の身を神と 聖母に捧げたのです。(22～27) 乙女は身分の高い女性でした。その父は騎士でありました。母はいるが兄弟姉妹はいませんでした。(28～30) 乙女と母親は互いに とても愛し合っていた、と思います。(31～32) この辺りを通るフランシスコ会士は誰でも皆ここをうろうろしていました。(33～34) さてこの一人がこの地に入り乙女を誑かしました。どのようにしたかをこれからお話しましょう。(35～37)

乙女は修道士に、母が彼女を出家させてくれるよう 説得を頼みこみました。そこで彼は言いました。「よいか、我々修道士がしているように、フランシスコ様のように暮らしたいのなら 貴女が必ず 清らかでなくてはならないでしょう。」(38～45) すると既に参っていて ぼ一となって降参していたこの娘は フランシスコ会士の話 を 聞くとすぐに言いました「神様が名誉をお与え下さいますように 貴方の修道会におれましたら その喜びに勝るものはある筈がありません。修道会に行けるのなら 神様は何と良い折りに 私をこの世に生まれさせて下さったことでしょう。(46～55) 修道士は娘の話の聞き終わると こう言いました。「気高い処女よ 神が私を愛して下さいますように 貴女がわが修道会に入りたいと思い きっとその処女を守り通せることを 確かに知ることが出来るなら 私が貴女を間違いなく われらの修道会に お入れ致しますようぞ。」(56～65) それで乙女は彼に 生涯ずっと処女を貫くと約束いたします。(66～68) そこで修道士は彼女を迎え 彼女をペテンに掛けたのですが 彼女はそうとは気が付きません。(69～71) 魂を失うからと言って彼の計画を 一言も喋らないよう言い付け、ひとに知られぬよう こっそりと彼女の美しい ブロンドの巻き髪を切らせ 頭の上を剃らせ 修道士になる男にふさわしい 身なりをさせて 彼がかつて助修士であった時に居た場所に 真っ直ぐやって来ました。(72～81)

ヘロデより輪をかけて狂っている男は そこを立ち去り、彼女と再会の日時を

決めますが 彼女は彼が去って行くのを見ると さめざめと涙をながすのでした。(82~85) 彼女に有り難い教義を手ほどきする筈の男は 彼女を他人の疑惑の目にさらす事をしたのです。こんな男は酷い死に方をすればよいのだ。(86~89) 彼が言い聞かせた事を 彼女は全てお告げのように受け取りました。彼女はその心を神に差し出していました。彼の方でも神にある心を捧げていましたが 神はそれにお返しをされることでしょう。(90~94) 彼女の考えている立派な思いとは 全然違うことを彼は考えておりました。(95~96)

二人の考えることは全く別なことでした。なぜなら彼女はこの世の驕った気持ちで 自分から取り除くことを考えていましたし、罪深い心を迸らせて 淫欲の火を燃やしている彼は 処女を風呂に連れて行き そこなら神の考えが及ばず そして彼の邪魔が出来ず 彼女に話す事に神の 反対の及ばないことを しきりに考えていました。(97~108) こんな事にその思いを募らせていたのですが 仲間の修道士は、彼の傍を通ると 彼が口を利かないのに驚いて こう言いました、「シモン坊よ、何を考えているのか」「これまでに思い付いたうちで 一番良い説教のことを考えているのです。」「しっかり考えなざるがよい」と仲間はいいました。(109~115) シモン修道士は 残した乙女のこと以外に 他の事を考えることが出来ません。彼女の方は〔修道士らしく腰に〕綱を締められる時が来るのを待ち望んでいます。(116 ~121) 彼女は彼が言い聞かした事を 胸に思い出しています。(122 ~123) 彼女を生んだ母親から 三日間ひき離されたのですが 母親は大層力を落としました。(124 ~126) 娘の居所を知らない母親は すっかり元気をなくしてしまいました。(127 ~128) その一週間というもの毎日 心中苦しみに塞がれていました。泣きながら娘のことを嘆いていますが 娘は手紙一つ出すでなし、それどころか、母親から離れて行くことを考えていたのです。(129~133) 乙女はその美しい髪を剃らせましたが まるで従僕が頭を剃られたようで その上革靴を履き 男物の寛衣を羽織り それは前が二つに割れていました。(134 ~138) まったく若者のような顔つきで 約束の場所へ そのいでたちでやって来たのです。(139~141) 悪魔が唆し、言いくるめている修道士は彼女の来たのを大いに喜びます。(142~144) フランシスコ会に彼女を迎えさせ まんまと修道士たちを欺くことが出来ました。会服を与え 大きく剃りを入れて 修道院へ来させました。(145 ~149) 彼女は院内でも回廊でも 振る舞い方をちゃんと心得え お経もしっかり学び 歌うことも覚えめました。(150~153) 他の修道士たちと教会で 上手に、優雅に歌い とてもまじめに勤めました。(154~156) 今やドゥニーズ嬢は 望みが全て叶いました。彼女の名前も変わりません ドゥニーズ坊と呼ばれました。(157~160) 私は何を言おうとしていましたっけ? (161) シモン坊は彼女に対して悦楽の限りを尽くし 例の新しい遊びを彼女に教えました が 誰もそれには気が付きませんでした。(162 ~165) ドゥニーズ坊はその行いによって 修道士の皆の目を欺きましたが 彼女はそれほど礼儀正しく、献身的でした。(166~168) 僧院の修道士た

ちはみんな ドゥニーズ坊を愛していました。(169~170) 一番愛していたのはシモン坊ですが しばしばマット付き担架に付きましたが そこからなかなか離れず (一物も小さくならず) そこが何より大好きで 大した担架担ぎでした。(171~175) 無頼の徒の道を行き 使徒の道を外れました。(176~177) 彼女には彼流の阿弥陀経を教え 彼女も進んでそれを覚えたのです。(178~179)

園中を彼女を連れ歩き 他の仲間のことは気に掛けずに参りましたが ある事が起こりました。さる騎士の館に二人がやって来たのですが 騎士は良いワインを酒蔵に持っていて 進んで彼らにワインを振る舞いました。(180~185) さて騎士の奥方はとくと ドゥニーズ坊を眺めておりましたが その顔・物腰を見ているのです。(186~188) 奥方はドゥニーズ修道士が 女であることに気がつきました。本当にそんなのかどうか確かめたいと思います。(189~191) 食卓を片付けさせると 物事を心得た奥方は ドゥニーズ坊の手を取りました。(192~194) 殿に微笑みかけて じっくりとして言いました「外で気晴らしにお出でなさいまし 二人づつ二手に分かれましょう シモン坊さまをお連れ下さい ドゥニーズ坊さまには わたくしの懺悔を聞いて頂きます。」(195~201) 修道士たちは楽しむどころではなかった。(202) フランシスコ会士たちはいっそ ポントワーズにでも行きたかった。二人は奥方の言葉に気が重くなる。(203~205) この言葉は二人には嬉しくありませんでした。事の発覚を恐れたのです。(206~207) シモン坊は奥方の方に向かい 近くに寄ると、こう言いました「奥様、告解は私になさいませ こちらの修道士は告解を聞き 懺悔を共にする免許を持っておりません。」(208~212) 奥方は答えた「こちらのご坊に私の罪をお話し 懺悔をしたいのです。」(213~215) そこで奥方は自室に彼女を招き ドアをしっかりと閉めます。ドゥニーズと中に閉じ籠もり こう言います「一体誰が こんな宗教に入るなどという 愚かな事をさせたのです? 魂が肉体から離れる時 神が私の罪をお許し下さいますように。私に真実を話しても そのために悪いようにはならないでしょう 聖霊が私をお助けになるように。私を信じなさい。」(216~227) 彼女はびくびくしていたものだから 一生懸命言い訳します。(228~229) しかし奥方は言葉をつくして 出来る限り彼女を説得し 彼女はそれ以上逆らえませんでした。(230~232) 膝まづいて許しを乞い 手を合わせて自分を辱めないよう頼み それから 最初から最後まで彼が母親の所から連れ出したこと 自分が何者であるかを話し 何一つ隠しませんでした。(233~239)

奥方は修道士を呼び 騎士の前で彼に言いました これほどの恥ずべき事をした男の話は聞いた事がないと。(240~243) 「贖坊主、偽善者、貴方の暮らしは偽りで汚れています。お腰の綱で貴方の首を絞める者がいても 良い仕事をしたという事になるでしょう。うわべは立派でも 内側がすっかり腐っている そんな人間がこの世を導いています。貴方を育てた乳母は 余程悪いものを食べさせたでしょう。貴方という人は あんな美しい女性に 酷い辱めを味わせたのだから。

サン・ドゥニ様にかけて申しますが こんな修道会は少しも立派ではありません。あなた方は、ダンスもキャロルもいけない ヴィエルもタンブリンもハーブも 芸人たちを呼んでの楽しみも禁止しましたね。禿どの、申して下さい 聖フランシスコ様はそんな暮らしをなさいましたか。裏切り者と判ったのですから 貴方には恥ずべきことが相応しい。貴方に罰を与えるのが誰か もう充分判ったでしょう。」(244～267) それから大きな箱の蓋を開けたのは 修道士を入れるためです。シモン修道士は奥方の側で 這いつくばり十文字になります。騎士は率直で優しい心の持ち主でしたが、男が十文字になったのを見ると気持ちを和らげ、右手で引いて起こして言います 「坊よ、貴方はこの一件からすっかり自由になりたいか。お嬢さんを嫁がせるのに百ポンドを私たちに渡しなさい。(268～279) 話しを聞いた時、修道士はこれほど嬉しいことは今までに無い程でした。(280～281) そこで彼はお金を騎士に支払う約束をしました。質草を流さずに支払うことでしょう。どこでお金をつくるかある程度判っていました。(282～285) それから暇乞いをして旅立ちました。(286)

奥方は持ち前の心の広さから ドゥニーズ嬢を預かりました。彼女は何も恐れることはありません。しかし彼女の秘密が 彼女が男と寝たことも 誰にも知られぬように すっかり安心出来るように 奥方に頼みました。彼女の故郷でなければ 国中で彼女をもっとも 求める男を探し出して 彼女は立派に結婚出来るでしょう。(287～298) ドゥニーズが楽しいことを考えられるように 奥方は心を砕きました。(299～300) いい加減な慰めは言いません。彼女のベッドに 奥方の一番良いドレスを持ってきて ためらわずにてきぱきと 彼女を力付けました。(301～305) 奥方は彼女に言いました。「明日になったらこれをお召しなさい。」(306～307) 彼女が寝る前に 自分の手でそれを着せました。他人が彼女に触れるのが嫌だったのです。奥方は利口で礼儀を知っている婦人でしたから 自分のことは自分で きちんとしたかったのです。(308～313)

遣いを作ってこっそりと ドゥニーズの母親を呼びました。(314～315) 亡くしたと思っていた母親は 娘を見て とても喜びました。(316～318) 奥方は、ドゥニーズは女子修道会に行っていた、ある女性が彼女を連れ去ったが ある宵に彼女を連れて来た、彼女は気も狂わんばかりだった、と母親に信じさせたのですが これは正しいことでした。(319～324) 皆様は何をお話ししようとしていましたか 彼らの言葉をお話ししようとしていましたのかな。(325～326) そんな事でふざけていても仕方がありません。ドゥニーズがそこにいる間に 例のお金は届けられました。(327～329) 彼女が自分の心に添って振る舞うまでに そんなに時間は掛かりませんでした。(330～331) かつて彼女に求婚していた ある騎士に嫁ぎました。(332～333) 今やドゥニーズの奥方と呼ばれ フランシスコ会の衣を着ているよりはるかに名誉な境遇でありました。(334～336)

ドゥニーズ坊の話は終わり